

◆ 掲載店舗情報

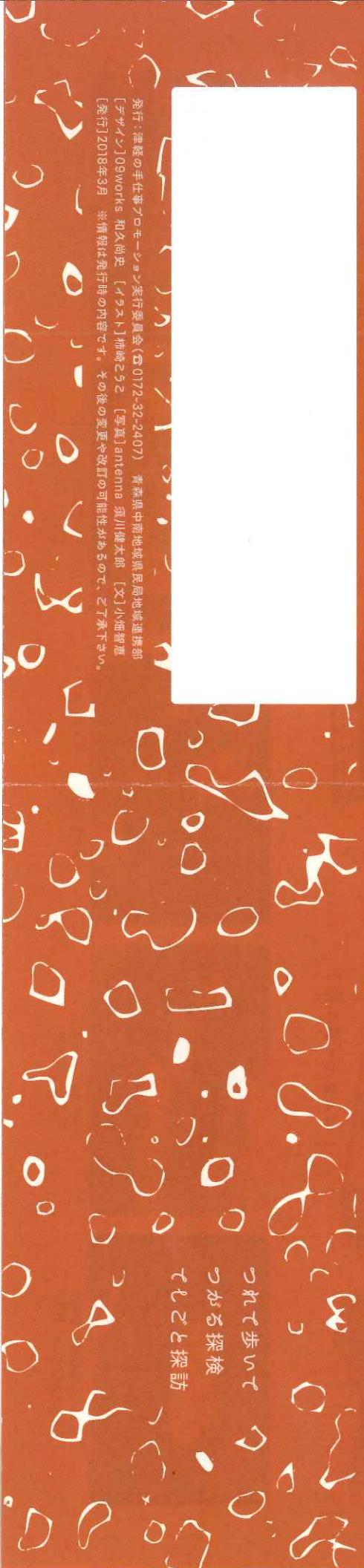
- 居間屋「まなしやん亭」 地場産材を使い、独自にアレンジした郷土料理などを津軽塗の器で提供。
[居間] 0172-36-6500 / 弘前市土手町36-13
- 木村漆工房 津軽塗の製造、海外向けの商品開発から神社仏閣等の修繕まで手掛ける。
[津軽] 0172-27-6505 / 弘前市山形1-4-8
[奥州] 0172-32-6570 / 弘前市代官町106
- 蔵の店 和雑貨「与志む良」 普段使いから贈り物まで、津軽塗の食器、弁当箱、和雑貨などを販売。
[津軽] 0172-32-6570 / 弘前市代官町106
- クラフト&和カフェ「匠館」 弘前の職人の手による伝統工芸を展示、販売。和にこだわったメニューも提供。
[津軽] 0172-36-6505 / 弘前市新緑町9-3
[奥州] 0172-32-1408 / 弘前市駅前町16-3
- 「バー」 旬の食材を活かした昔ながらの津軽の味、地酒を津軽塗の器、器で提供。
[津軽] 0172-36-6505 / 弘前市新緑町9-3
[奥州] 0172-32-1408 / 弘前市駅前町16-3
- 弘前市立観光館 2階エスーエスで、津軽塗の下地から完成まで48の作業工程を展示している。
[津軽] 0172-37-5501 / 弘前市下白銀2-1
- 弘前市立博物館 弘前城跡の一角に置き、弘前藩にまつわる美術工芸資料などを系統的に展示。
[津軽] 0172-35-0700 / 弘前市下白銀1-6
[奥州] 0172-35-1229 ~ 113 / 0172-35-0700 / 弘前市下白銀1-6

津軽の手仕事

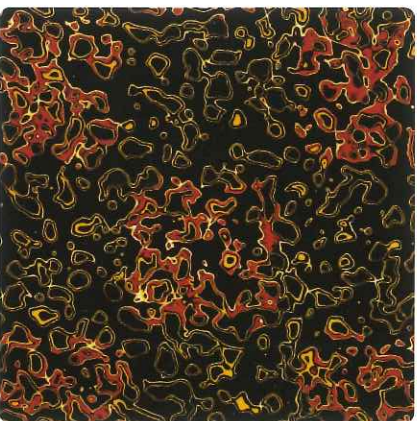
つがるぬり

【津軽塗】

つれて歩いて
つがる探検
てらと探訪

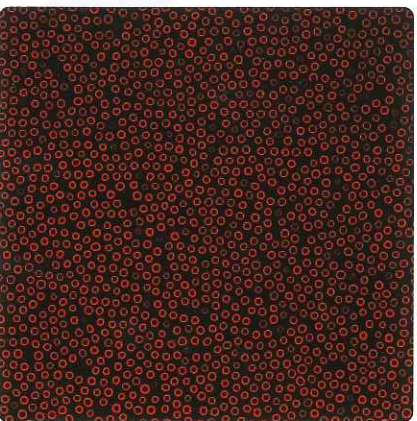


4種類の津軽塗



唐塗(からぬり)

仕掛けペラという穴の開いたペラを用い、卵白を加えた粘度のある黒漆で斑点模様を付けた上に色漆を塗り重ね、砥石や炭で研ぐと、色漆の断面模様が現れます。



七々子塗(ななこぬり)

魚の卵(ななこ)を思わせる江戸小紋風の粒な塗。漆を塗った直後に菜種を蒔き、乾いた後に菜種を剥いてできる輪状の突起を研ぎ出します。



紋紗塗(もんじやぬり)

筆に付けた黒漆で絵や紋様を高肉に盛り上げて描いた直後に、粉殻の炭粉を蒔き付けて乾燥させる。その後、研ぎ出すと炭粉の中から模様が現れます。



錦塗(にしきぬり)

黄と朱色で市松模様にはばかし塗りしたななこ地に桜唐草、紗様型を筆描きし、緑色の隈取りを添え、錫粉を加えた朱漆を刷毛塗りし、研ぎ出します。

藩主による津軽の産業育成が始まり 刀の鞘を彩る装飾から調度品へ

弘前藩第四代藩主 津軽信政が治めた江戸時代中期は交易の拡大などに伴い、上方や江戸の文物が地方に伝播しました。信政は藩内の産業育成の一環として弘前城内に塗師(ぬし)の作業場を置き、当初は刀の鞘に漆塗りをして美しく彩り、やがて装身具や調度品、器や重箱も色漆で飾るようになりました。明治6年、ウイーン万国博覧会で産地を記す必要が生じた時は「津軽塗」の名が初めて使われたと言われています。
2017年12には津軽塗が、青森県で初めて「国の重要無形文化財(工芸技術)」に指定されました。漆芸分野では、石川県の輪島塗に次ぐ国内2例目です。



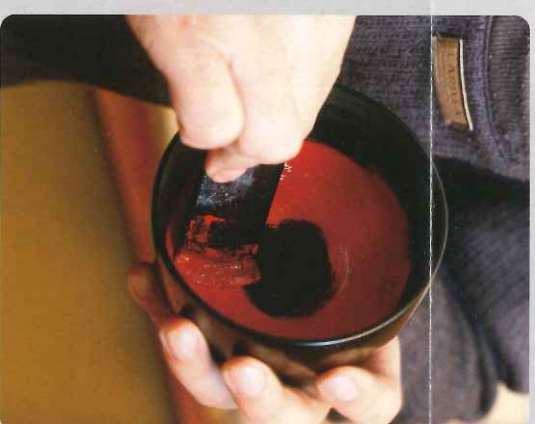
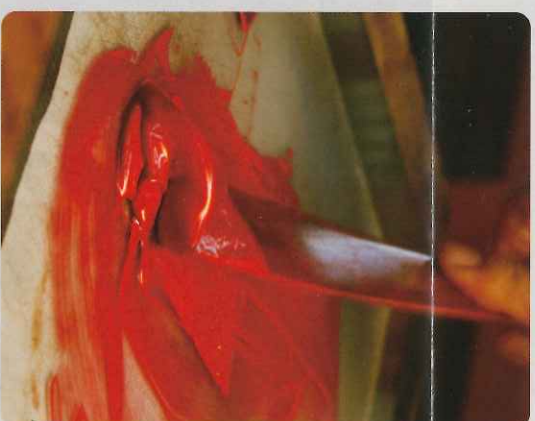
明治期の重箱(かわりぬり)五段重 [弘前市立博物館蔵]



弘前市立博物館は、江戸後期から明治前期にかけて作られた154枚の手板(今で言う「模範サンプル」)を収蔵しています。企画展などで展示することがあるので、お出掛けの際は展示内容をチェックしてみてください。

へらですり潰した漆を和紙で濾す 幾重もの色漆の層が、奥深い模様を生む

(取材協力: 木村漆工房)



津軽塗は、漆を数十回塗り重ね、磨き、研磨仕上げを施す「研ぎ出し塗り」という技法で作られます。漆を塗った後は乾かす時間が必要で、48工程を要する唐塗は、完成までには約3か月を要します。多くの漆器が「塗装した上に模様を描く」のに対し、「何重にも塗り重ねた色漆の層を研ぎ出す」ことで模様が生まれる津軽塗は、底から発する奥行き、力強さがあります。色漆を作る時は透き通った胎色の漆に顔料を加え、滑らかにきめ細かくなるまで何度もへらなどですり潰します。
塗り始めには和紙に色漆を取り、紙捻り(こより)状にして絞って濾した漆を使います。砥石などで模様を出す研ぎ出し、磨きなどの工程を経て、仕上げの段階ではさらに多い枚数の和紙で濾してゴミなどを取り除いた、より粒子の細かい漆を塗って、滑らかな表面を作り上げます。

